様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２８３４

研究課題名（和文）在日コリアンの「民族教育」における排他的構造の変化

研究課題名（英文）Development of Cultural Identity of Zainichi(Koreans living in Japan) and Their Exclusive Attitude

研究代表者
李　修京（YI, SOOKYUNG）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：１０３３６９２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：在日コリアンが民族教育を始める段階では、祖国への漠然とした情緒的帰属意識はあったものの、民族的・集団的同一性意識は薄かったと言える。民族教育への弾圧と抵抗の過程でアイデンティティに目覚めるが、在日コリアン社会が分裂し、祖国との関係や交流によるアイデンティティの揺れや、同族・祖国に対する「帰属―離脱症候群」を抱くようになる。以後、意識的に「在日アイデンティティ」の定立に努めるようになるが、これは、日本社会への「相近」の努力であり、共生を求めるものであった。アイデンティティの変化に伴い、在日コリアンの排他的属性も、潜在的離脱欲;反日;同族・祖国への疑念;普遍的共生欲に変化してきたのが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アイデンティティは排他的な集団的属性の表れであり、共生を妨げる要素と見られてきた。しかし、今回の研究を通して、アイデンティティは固定した集団的属性ではなく、教育（学習）を通して普遍的価値の共有を目指して変化・発達していることが確認されており、アイデンティティ発達は、相近（convergence）・交互（reciprocity）努力を同伴し、共生能力の形成に繋がるという一般化を導き出すことができた。この一般化は、民族・国民といった集団的属性の強化を図って、反日―嫌韓のような排他的意識・行動を触発する政治的動きに反省を促す理論的根拠の提示にもなると考えられる。

研究成果の概要（英文）：At the stage when Koreans began their Nation-building education in Japan, despite having a vague sense of emotional belonging to their homeland, they had little sense of nation and collective identity. Their identity was awakened through the process of repression and resistance against Nation-building education in Japan. However, as the Korean society in Japan was divided, they began to experience the shaking of identity and "belonging-withdrawal syndrome" toward their kinship and homeland caused by the relationship and interaction with their homeland. After that, they consciously began to strive to establish a "Zainichi identity," but it was an effort to convergence to Japanese society. Along with the change in identity, it was confirmed that Koreans' exclusive characteristics have also been changed into a latent desire to withdraw; suspicion of their kinship and homeland as well as a universal desire to live in harmony.

研究分野：社会学（歴史社会学、多文化共生）

キーワード：相近（convergence）　交互（reciprocity）　共生努力　アイデンティティ　在日コリアンルーツ住民　民族と国民　情緒的帰属意識　普遍的共生欲

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

在日コリアンの民族教育をめぐる一般の認識と研究には次のような特徴が見られる。①「民族教育」という概念はイデオロギー的、信仰的ニュアンスを持っていて、排他的なナショナリズムの属性を育成するものという「規範語」として使われてきた。②民族教育に関する研究は、政治的・社会的運動として、在日コリアンの権益向上のための告発・啓蒙的活動に直接つながっていて、学術的成果として蓄積されることが困難であった。③在日コリアン（マイノリティ）と日本（マジョリティ）は排他的特殊関係であるという前提の下、在日コリアンの民族教育を規定してきた。したがって、在日コリアンの民族教育は、固定した排他的アイデンティティを養う教育活動として理解される場合が多かった。こうした背景から、①在日コリアンの民族教育の排他的性格は、内発的・原初的なものなのか、外発的・人為的なものなのか、②在日コリアンの民族教育の排他的構造は固定しているのか変化できるのか、変化するのなら、その変化は学習者の文化的アイデンティティの発達と連動するのかという疑問が生まれた。

## ２．研究の目的

上の疑問（問い）に対する答えを探し求めるのが本研究の目的である。この目的に到達するために、次のような具体的な研究目標を設定した。

①民族教育は始まる段階から排他的だったのか、その後の状況の影響で排他的になったのかを確認する。

②韓半島の政治的・思想的分裂と連動する在日コリアン社会の分裂が民族教育の排他的構造にどう影響したのか明らかにする。

③日韓国交正常化に伴い日本人学校に就学する在日コリアンの子どもが増えることによって民族教育の排他的構造はどう変わったのかを確かめる。

④在日コリアンの個々人の主体的選択の要求と民族的アイデンティティの育成を望む国家の要求間の葛藤や摩擦はどのように表れ、民族教育の排他的構造にどう影響したかを確認する。

⑤以上を総合的に整理し、マイノリティの文化的アイデンティティの発達と民族教育の排他的構造の変化との関係を説明する一般化を導き出す。

## ３．研究の方法

研究作業は、民族教育をめぐる状況・民族教育の実践・学習者のアイデンティティの発達に分けて行う。

①民族教育をめぐる状況（民族教育の始まり・阪神教育闘争・日本の反共体制の強化・韓国戦争・在日コリアン社会の分裂・日韓国交正常化・1980 年代以後の日本―韓国―北朝鮮の国際関係及び在日コリアンと「祖国」との関係など）に関する文献資料の精査を通して事実関係を整理し、それぞれの事実に関与していた人とのインタビューを行って、文献記録の真偽を確認するほか不足を補う。

②民族教育の実践は、民団系学校と総連系学校に分けて、政治的ナショナリズムの注入が

行われやすい教科の教科書や授業の分析、特別活動・母国修学のようなプログラムなどの教育活動の観察と分析を行い、その結果を踏まえ、子どもと教師とのインタビューを通して深層の要求や希望を確認する。

③多文化教育における文化的アイデンティティの発達過程、民族教育における意識の変化過程などに関する研究成果に基づいて、アイデンティティの変化・発達のフレームワークを作成し、それを準拠とした質問アイテムをもって在日コリアン（子どもから大人まで）とのインタビューを通して在日コリアンのアイデンティティの変化・発達の一般的な傾向を確認する。

## ４．研究成果

在日コリアンが民族教育を始める段階では、祖国への漠然とした情緒的帰属意識はあったものの、民族的・集団的同一性意識は薄かったと言える。民族教育への弾圧と抵抗の過程でアイデンティティに目覚めるが、在日コリアン社会が分裂し、祖国との関係や交流によるアイデンティティの揺れや、同族・祖国に対する「帰属―離脱症候群」を抱くようになる。以後、意識的に「在日アイデンティティ」の定立に努めるようになるが、これは、日本社会への「相近」の努力であり、共生を求めるものであった。アイデンティティの変化に伴い、在日コリアンの排他的属性も、潜在的離脱欲;反日;同族・祖国への疑念;普遍的共生欲に変化してきたのが確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>李修京・権五定 | ４．巻<br>73 |
| ２．論文標題<br>在日コリアンの ‘ 共生に生きる ’ という主体的選択（4）：多文化共生の視点から見る在日コリアンの ‘ 法的地位 ’ 問題 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ｉ』 | ６．最初と最後の頁<br>235-247 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>李修京・権五定 | ４．巻<br>72 |
| ２．論文標題<br>在日コリアンの共生に生きる ’ という主体的選択(3)－在日コリアンの共生を求める「相近」努力 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ｉ』 | ６．最初と最後の頁<br>95~108 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>李修京・金炫佑・石黒みのり・蔡光華・袁立 | ４．巻<br>72 |
| ２．論文標題<br>多文化社会化が進む東アジアにおけるコリア教育―韓・日・中の韓国・朝鮮語教育― | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ｉ』 | ６．最初と最後の頁<br>73-94 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>李修京 | ４．巻<br>12 |
| ２．論文標題<br>外国人参政権と;参議院憲法審査会 ’ の口述考察 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>民主的多文化共生社会の実現を考える：「共生」の市民意識は成長したのか | ６．最初と最後の頁<br>157-171 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>権五定 | 4．巻<br>12 |
| 2．論文標題<br>民主主義教育とナショナリズム教育の狭間－人間の尊厳・排他と分裂、そして、多文化共生－ | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>民主的多文化共生社会の実現を考える：「共生」の市民意識は成長したのか | 6．最初と最後の頁<br>21-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>李修京 | 4．巻<br>11 |
| 2．論文標題<br>地域社会の住民’としての担保となる地方参政権 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>韓日多文化共生の地平 | 6．最初と最後の頁<br>81-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>権五定 | 4．巻<br>11 |
| 2．論文標題<br>多文化社会の構築努力と課題 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>韓日多文化共生の地平 | 6．最初と最後の頁<br>7-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>李修京 | 4．巻<br>71 |
| 2．論文標題<br>在日コリアン学校の教科書に見る‘在日論’の一考察 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>東京学芸大学紀要　人文社会系Ｉ | 6．最初と最後の頁<br>127～142 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>李修京・権五定 | 4．巻<br>71 |
| 2．論文標題<br>在日コリアンの‘共生に生きる’という主体的選択（2）－在日コリアンのアイデンティティの発達と排他的属性の変化－ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>東京学芸大学紀要　人文社会系Ⅰ | 6．最初と最後の頁<br>143～155 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　2件／うち国際学会　11件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>李修京 |
| 2．発表標題<br>外交文書で見る在日朝鮮大学校の認可をめぐる日本側の動向 |
| 3．学会等名<br>日本近代学会（国際学会） |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>権五定 |
| 2．発表標題<br>国の多文化政策と市民の多文化共生 |
| 3．学会等名<br>日本近代学会（国際学会） |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>権五定 |
| 2．発表標題<br>民主主義教育とナショナリズム教育の狭間－人間の尊厳・排他と分裂、そして、多文化共生－ |
| 3．学会等名<br>民主的多文化共生社会の実現を考える：「共生」の市民意識は成長したのか（国際学会） |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>李修京 |
| ２．発表標題<br>外国人参政権と参議院憲法審査会’の口述考察 |
| ３．学会等名<br>民主的多文化共生社会の実現を考える：「共生」の市民意識は成長したのか（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>権五定 |
| ２．発表標題<br>多文化社会の構築努力と課題 |
| ３．学会等名<br>韓日多文化共生の地平（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>李修京 |
| ２．発表標題<br>地域社会の住民’としての担保となる地方参政権」 |
| ３．学会等名<br>韓日多文化共生の地平（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>李修京 |
| ２．発表標題<br>在日同胞教育の場の活性化方案 |
| ３．学会等名<br>神奈川韓国総合教育院同胞教育活性化方案セミナー（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>李修京 |
| ２．発表標題<br>社会の構成員・地域の住民としての多文化共生教育（グローカル市民教育） |
| ３．学会等名<br>多文化共生国際学術大会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>権五定 |
| ２．発表標題<br>多文化時代を生きるマイノリティーの選択　在日同胞の「共に生きる道」への模索 |
| ３．学会等名<br>韓国日本近代学会第41回国際学術大会（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>李修京 |
| ２．発表標題<br>在日同胞の民族教育と生活史 |
| ３．学会等名<br>東アジア研究所第13回国際学術シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>権五定 |
| ２．発表標題<br>在日同胞の民族教育と生活史 |
| ３．学会等名<br>東アジア研究所第13回国際学術シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>東義大学校東アジア研究所編 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>博文社 | 5．総ページ数<br>340 |
| 3．書名<br>東アジアのマイノリティー社会と他者表象 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>東義大学校東アジア研究所編 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>博文社 | 5．総ページ数<br>364 |
| 3．書名<br>在日同胞の民族教育と生活史 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

李修京と権五定の研究成果の一つである近刊の出版物（6月末発行予定）は含まれていない。

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 権　五定<br>(Kwon OJUNG)<br>(30288641) | 東京学芸大学・教育学部・研究員<br>(12604) | |

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計5件

| | |
|---|---|
| 国際研究集会<br>国際学術大会　民主的多文化共生社会の実現を考える：「共生」の市民意識は成長したのか | 開催年<br>2021年～2021年 |
| 国際研究集会<br>国際学術セミナー　韓日多文化共生の地平 | 開催年<br>2020年～2020年 |
| 国際研究集会<br>多文化共生社会における外国人学校 | 開催年<br>2020年～2020年 |
| 国際研究集会<br>近代韓国の西洋文化と初期西洋音楽 | 開催年<br>2021年～2021年 |
| 国際研究集会<br>国際学術大会　日本の多文化化と在日コリアン | 開催年<br>2021年～2021年 |

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 韓国 | 韓国教育大学 | 韓国昌原中学校 | | |
| 日本 | 東京学芸大学 | 連合学校 | | |
| 韓国 | | | 統一日報ソウル支社 | |
| 韓国 | 崇實大学校　韓国基督教文化研究院 | 円光大学校 | 国立慶尚大学校社会科学研究院 | 他2機関 |
| 韓国 | 崇實大学校　韓国基督教文化研究院 | 安養大学音楽HK | | |